様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０５２６

研究課題名（和文）インドネシア国スラウェシ島の絶滅危機言語の多面的記述と言語データのアーカイブ化

研究課題名（英文）Multi-dimentional Description of the Endangered Languages of Sulawesi, Indonesia, and Archiving of the Linguistic Data

研究代表者
内海　敦子（Utsumi, Atsuko）

明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：７０４３１８８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：最終的な遂行後の文章
　私の研究題目は「インドネシア国スラウェシ島の絶滅危機言語の多面的記述と言語データのアーカイブ化」で、平成23年度から平成26年度の四年間にわたって以下の三つの活動を行った。第一に会話やナラティブ・スピーチなどの自然言語、及び芸能や儀式など文化活動の映像・音声データを採集しアーカイブ化することで、同時に申請者の研究成果を英語で出版する。第二に現地および他国の研究者と共同でそれらの言語の記述を進め、大量のデータを活かした言語の多様な側面の分析を行うこと。第三に民族語からインドネシア語マナド方言への言語シフトと言語態度に関する社会言語学的調査を行うことである。

研究成果の概要（英文）：This research project was titled “Multi-dimensional Description of the Endangered Languages of Sulawesi, Indonesia, and Archiving of the Linguistic Data”.
There were three main objectives in the project which has been pursued for four years starting from 2011 academic year. The first aim is to collect audio and visual data of the endangered languages, such as narrative speech, performing arts, and ceremonies. The collected data were uploaded in the archives of Tokyo University of Foreign Studies and Melbourne University. Papers which were based on the data collected were published in journals and presented in international conferences. The second aim is to cooperate with local researchers to describe the endangered languages and analyze the data multi-dimensionally. The third aim was to investigate sociolinguistic status of the endangered language, linguistic attitude of the speakers, and language shift through distributing and collecting sociolinguistic questionnaire.

研究分野：言語学

キーワード：記述言語学　アーカイブ化　少数民族言語　サギル諸語　ミナハサ諸語　社会言語学

１．研究開始当初の背景

(1)インドネシア国には 700 程度の言語が話されているが、その多くは調査と記述が不十分である。北部スラウェシ州には 11 の少数民族言語が存在する。これらの言語のうち、4 つがサギル諸語、5 つがミナハサ諸語というマイクログループを形成する。これらのマイクログループはJ.N.Sneddonによる系統関係を論じた比較歴史言語学の先行研究(Sneddon 1978, Sneddon1984)があり、その他語彙集や形態論などで部分的な記述は存在した。しかし、これらの言語の包括的な文法の記述は、研究者本人の Bantik 語（サギル諸語の一つ）についてのものの他は、ほぼ存在しなかった。大量の自然な談話データがなくては正確に分析できないテンス・アスペクト・ムードにかかわる分析、談話的小辞の機能、イントネーションとプロソディといった側面の研究はほぼ行われていなかった。

(2)数少ない言語記述のデータはアクセスしにくい状態にあり、特に音声や映像のデータは少数の研究者がそれぞれ保存しているだけで、多くの人が利用する状態にはなかった。

(3)これらの言語は話者が一万人から四万人と少ない上に、若い世代への伝達が行われていないので、消滅の危機にある。

インドネシア語標準変種がインドネシア国全体で威信の高い書き言葉であると共にＨ変種である。親世代は子供達にインドネシア語標準変種の確実な習得を望むので、若年層はインドネシア語マナド方言（口語変種）を第一言語として習得し、インドネシア語標準変種を書き言葉として学ぶ。そのため、少数民族言語は軽視され、若年層に伝達していこうという動きは見られない。

従って、一刻も早く言語記述のためのデータを採集し、消滅することがあるならば、話者の子孫が利用できる形でデータをアーカイブ化する必要に迫られていた。

２．研究の目的

(1)本申請の研究課題名は「インドネシア国スラウェシ島の絶滅危機言語の多面的記述と言語データのアーカイブ化」でありインドネシア国の北部スラウェシ州の 11 の少数民族言語を対象とする。消滅の危機に瀕する北部スラウェシ州の少数民族言語を記録することは次の二点において重要である。第一に、オーストロネシア語族の系統関係の研究、および東インドネシア地域の地域的特色(areal features)の研究を行うにあたり、消滅する前に少数民族言語を様々な側面から記録する必要がある。第二に、これらの少数民族言語話者が将来民族語の復興を願ったときに、映像・音声データを含めた詳細で多面的な言語データが言語復興に必要不可欠となる。

(2)会話やナラティブ・スピーチなどの自然言語、及び芸能や儀式など文化活動の映像・音声データを採集しアーカイブ化する。同時に申請者の研究成果を英語で出版する。

(3)現地および他国の研究者と共同でそれらの言語の記述を進め、大量のデータを活かした言語の多様な側面の分析を行う。

(4)民族語からインドネシア語マナド方言への言語シフトと言語態度に関する社会言語学的調査を行う。

３．研究の方法

(1)言語記述のためのフィールドワーク

平成 23 年度から 26 年度にかけて、年に一度から二度、北スラウェシ州に研究者本人が赴き、それぞれ 3 週間程度のフィールドワークを行う。対象とする言語は Bantik 語、Talaud 語、Tonsawang 語の三言語で、それぞれの言語が話されている地域で、第一言語としてこれらの民族語を話してきた高齢の世代を対象に、伝統的な民族語の姿を、音声・音韻、形態、統語、意味、語用論の各分野について対面調査を行う。これにより、十分な質・量のデータを採集し、分析・記述に役立てる。

(2)他の研究者からの提供を含むデータの収集方法

北スラウェシ州における少数美奈億言語のデータ収集に関しては、主に次の四種類に分けて行う。第一に研究代表者本人が 1996 年より収集してきた Bantik 語と Talaud 語の elicitation（面談調査の際の作例）である。第二に研究代表者本人が収集する、自然な状況での言語のデータである。言語協力者が自らの過去を振り返ったり、現在の状況を語ったり、民話を語ったりした独白の談話データ、複数の話者が会話をしている自然な会話のデータが例として挙げられる。

第三に連携研究者および研究代表者本人が収集する Bantik 語、Talaud 語、Tonsawang 語の話者が祭や儀式において披露した、民族語での歌、踊り、祝辞や弔辞を述べたりした音声・映像データである。これらは言語を含む文化的なデータである。

第四にトモホン・インドネシアキリスト教大学 (Universitas Kristen Indonesia Tomohon、通称 UKIT)の言語チームが行っている少数民族言語による聖書の部分訳である。これには研究代表者本人は関与しないが、すでに作成中であるデータを広く公開するためにアーカイブ化を進める。

(3) アーカイブ化

収集したデータは、連携研究者の Dr. Anthony Jukes に協力を要請する。本研究期間内に、手持ちのデータのアーカイブ化は終了させ、新たに得た言語データもできるだけ多くアーカイブ化する。

また、研究代表者本人が文法や談話機能に関して現地調査を行った少数民族言語に関しては、他の研究者と少数民族語話者の両方が利用できるよう、紙ベースで英語での文法記述を行い、電子ファイルがオープン・ソースとして公開されるような媒体をなるべく

選んで発表する。
(5) 社会言語学的調査：調査票の配布・収集・分析
少数民族言語からインドネシア語マナド方言（およびインドネシア語標準変種）への言語シフトについては平林 2003 の先行研究が存在する。この研究において使用された言語使用実態に関する社会言語学的調査票を適宜修正し、北スラウェシ州の民族語話者の居住地域において配布し、収集する。特に、平成 20 年度から 22 年度にかけての調査において Talaud 語、Bantik 語、Tonsawang 語話者の言語使用と言語態度に関する社会言語学的調査票を配布・収集・入力・分析してきたが、不十分なデータが存在するので本研究期間内にて不足を補った。また、他の言語もインドネシアキリスト教大学(UKIT)のチームと協力して配布・収集していく。この作業によりそれぞれの言語の中年の話者は semi-speaker であり、伝統的な統語構造や形態音韻規則を持たなくなっているが、それらの言語変化と言語シフトがどのように関連して起こっているかを考察する。

４．研究成果
(1) 少数民族言語のフィールドワークに関して：データ収集とその公開
研究代表者は、平成 23 年度に 1 回、24 年度に 1 回、25 年度に 2 回、26 年度に 1 回のフィールドワーク調査を行った。すべての年度において 8 月に 3 週間、25 年度には加えて 2 月に 11 日間のフィールドワークを行った。研究対象言語は Bantik 語、Talaud 語、Tonswang 語であった。
音声データはこれらすべての言語について収集した。Bantik 語と Talaud 語は自然な独白と会話のデータを 2, 3 時間分ずつ収集した。多くの場合、音声データと共に映像のデータも収集した。それらの書き起こした文字データに関しては電子的なファイルに保存し、Flex などの形態・統語分析ソフトを利用し、分析を進めた。
映像データも、上記三つの言語について収集した。Bantik 語と Talaud 語の映像は、教会での説教、葬式、上棟式、結婚式等である。Tonsawang 語に関しては習俗の説明、聖なる場所の説明などの独白と、Tonsawang 語の歌の映像を収集した。
(2)アーカイブ化と上記の言語データの公開
上記のフィールドワークにて収集したデータは連携研究者の Dr. Anthony Jukes に渡して、Melbourne の La Trobe 大学の図書館にてアーカイブ化を依頼した。また、東京外国語大学にても新しくアーカイブを立ち上げたので、そちらにもオープンなデータとして公開するべくデータを加工した。
言語学的な研究発表に関してであるが、Bantik 語については談話・情報構造の分析を進め、口頭発表 3 回、論文発表を行った。Talaud 語に関しては動詞の形態論についての研究を進め、口頭発表と論文発表を行った。Tonsawang 語に関しては音声・音韻論・形態論の分析を進めたが、同じ地域の言語を対象としている研究者同士でのデータのやりとりだけで、公開には至っていない。
(3)研究代表者以外の収集したデータの蓄積
北スラウェシ州のインドネシア国立マナド大学およびインドネシアキリスト教大学の研究者との連携を構築した。マナド大学の Dr. Deisy Batunan には Talaud 語の儀式のデータと、Talaud 語各地の方言データの整理をしていただいた。Dr. Hendrik Paat には、インドネシア語マナド方言の少数民族言語に対する影響を分析するため、マナド方言のデータの収集および分析をしていただいた。インドネシアキリスト教大学の Mr. Albert Polii には各少数民族語に訳された聖書のデータを提供していただいた。それらはミナハサ諸語に属する Tontemboan 語、Tonsea 語、Tombulu 語、Tondano 語のデータである。
これらのデータはアーカイブ化するため、前述の Dr.Anthony Jukes に依頼して La Trobe 大学図書館へとデータを渡した。
(4)社会言語学的調査票の配布と収集
少数民族言語とインドネシア語マナド方言の言語使用実態および少数民族の人々のマナド方言への言語シフトに関する調査をするため、Bantik 語、Talaud 語、Sangir 語（以上三つはサギル諸語）に社会言語学的調査票を配布した。その集計と分析は Dr. Sri Budi Lestari の協力をいただいた。また、Talaud 語の北方方言である Nanusa 方言の話者に対する調査票の配布と収集は Dr. Deisy Batunan に依頼した。Tonsawang 語の配布と集計は研究代表者本人が行った。Tonsawang 語に関しては約 15 年前の先行研究があるため、比較が可能なデータを入手した。
これらの社会言語学的データは北スラウェシ州の言語シフトという観点から統一的に論文としてまとめつつある。

<引用文献>
平林輝夫. 2003. 『北スラウェシ州ミナハサ地方トンバトウ郡におけるトンサワン語の選択』. 大阪：大阪学院大学.
Sneddon, James N. 1978. *Proto-Minahasan: phonology, morphology, and wordlist.* Canberra: Pacific Linguistics.

Sneddon, James N. 1984. *Proto-Sangiric and the Sangiric languages.* [Pacific Linguistics Series B, No.91]. Canberra: The Australian National University.
内海敦子. 2005. 『Bantik 語の構造と接辞の意味・機能』. 東京大学博士論文.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　11　件）
①内海敦子、「Bantik 語の Pluractional Verb －意味分析と用例－」、『明星大学研究紀要－人文学部－日本文化学科』、査読無し、第 23 号、2015、pp 330-344.
https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=723&item_no=1&page_id=13&block_id=67

②Utsumi, Atsuko、‘Dialectal Differences in the Talaud Language’、*Papers from Second International Conference on Asian Geolinguistics*、査読無し、2014、pp 203-212.

③内海敦子、「代名詞 tou の用法：Bantik 語における情報構造表示の一例」、『明星大学研究紀要－人文学部－日本文化学科』、査読無し、第 22 号、2014、pp 361-380
https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=588&item_no=1&page_id=13&block_id=67

④Utsumi, Atsuko、‘The System of Tense and Aspect in the Bantik Language’、*NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia*. 査読有り、No. 55、2013、pp 219-237.
http://hdl.handle.net/10108/74334

⑤内海敦子、「言語資料：北スラウェシの民話のバンティック語テキスト『トゥミデン」および注釈と考察」、『明星大学研究紀要－人文学部－日本文化学科』、査読無し、第 21 号、2013、pp 267-284.
https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=507&item_no=1&page_id=13&block_id=67

⑥Utsumni, Atsuko、‘Talaud Verbs: Paradigm of Basic Verbs’、『東京大学言語学論集』、査読有り、第３３号、2013、pp 319-361.
http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/53482

⑦「インドネシア語マナド方言の書記方法」、『インドネシア　言語と文化』、査読有り、第 19 号、2013、pp 21-32.

⑧Utsumi, Atsuko、‘Applicative verbs and applicative construction in the Bantik language'、*Journal of Southeast Asian Linguistics Society*、査読有り、Vol. 5-1、2012、 pp107-121.
http://jseals.org/

⑨Utsumi, Atsuko、‘Reduplication in the Bantik Language’、*Asian and African Language and Linguistics*、査読有り、Vol.6、2012、pp 5-26.
http://hdl.handle.net/10108/69371

⑩内海敦子、「タラウド語のアスペクト体系と結果相・継続相を表す接頭辞 UA-が付加した動詞」、『明星大学研究紀要－人文学部－日本文化学科』、査読無し、第 20 号、2012、 pp 236-250.
https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=489&item_no=1&page_id=13&block_id=67

⑪内海敦子、「タラウド語使用地域の言語使用と言語意識－インドネシア国、北スラウェシ州における民族語使用実態－」、『明星大学研究紀要－人文学部－日本文化学科』、査読無し、第 19 号、2011、pp 217-234.
https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=538&item_no=1&page_id=13&block_id=67

〔学会発表〕（計　21　件）
① Utsumi, Atsuko、‘Topic-Marking Constructions in Bantik’、第四回　オーストロネシア諸語の情報構造に関する国際ワークショップ、2015 年 2 月 12 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

②内海敦子、「北スラウェシ州の民話の分類」、第 45 回日本インドネシア学会研究大会、2014 年 11 月 16 日、神田外国語大学、千葉県千葉市美浜区.

③ Utsumi, Atsuko、‘Word Order in Languages in North Sulawesi’、インドネシア関係研究者交流ミーティング　、2014 年 9 月 11 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

④Utsumi, Atsuko、‘Word Order and Genre in the Bantik Language’、24th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society、2014 年 5 月 30 日、Yangon University、ミャンマー国ヤンゴン市.

⑤Utsumi, Atsuko、‘Dialectal Differences in the Talaud Language’、2nd International Conference on Asian Geolinguistics、2014 年 5 月 24 日、Chulalonkorn University/Pathumwan

Princess Hotel、タイ国バンコク市.

⑥内海敦子、「バンティック語の語順とテキストのジャンル」、第四回　「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」研究会 、2014 年 4 月 19 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

⑦内海敦子、「バンティック語における pluractional verbs―動作主体の複数性と行為の複数回性―」、第 6 回　文法研究ワークショップ　複数性（2）　、2014 年 3 月 18 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

⑧Utsumi, Atsuko、‘Newly introduced NPs, continuous topics, and contrastive topics in Bantik discourse’、 第三回　オーストロネシア諸語の情報構造に関する国際ワークショップ、2013 年 12 月 14 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

⑨Utsumi, Atsuko、‘Preliminary Survey of Talaud Dialectal Differences’、 1st Annual Meating of Asian Geolinguistics Society of Japan　、2013 年 6 月 14 日、青山学院大学、東京都渋谷区渋谷

⑩Utsumi, Atsuko、 Jukes, Anthony、‘An Attempt to `Write' a Vernacular Variety: Written Manado Malay in Advertising, Pop Songs, and Social Networking’、 17th annual meeting of Interonational Conference on Malay-Indonesian Languages、2013 年 6 月 9 日、Bung Hatta University、インドネシア国パダン市.

⑪ Utsumi, Atsuko 、‘Morphology and Semantics of Basic Verbs in the Talaud Language’、 23rd Southeast Asian Linguistics Society、2013 年 5 月 31 日、Chulalongkorn University、タイ国バンコク市.

⑫内海敦子、「インドネシア語マナド方言の書記方法」、第 43 回日本インドネシア学会研究大会 、2012 年 11 月 17 日、慶應大学湘南藤沢キャンパス、神奈川県藤沢市遠藤

⑬ Utsumi, Atsuko 、‘Types of Clause Combining in Bantik’、「インドネシア諸語の記述的研究」第 12 回研究会(国際研究会)、2012 年 10 月 7 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

⑭Utsumi, Atsuko、‘The pitch accent and the Bantik language: How a pitch pattern is recognized when overridden by sentential intonation’、2012 年 7 月 5 日、12th International Conference on Austronesian Linguistics 、 Udayana University、インドネシア国バリ島デンパサール市.

⑮内海敦子、「バンティック語のピッチアクセントと文イントネーション」、「インドネシア諸語の記述的研究」第 11 回研究会、2012 年 5 月 19 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

⑯内海敦子、「テクスト中のバンティック語のテンスとアスペクト」、「インドネシア諸語の記述的研究」第 10 回研究会、2012 年 3 月 2 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

⑰Utsumi, Atsuko、‘Bantik Morphology: Postulating Subtypes of the Bases’、 「インドネシア諸語の記述的研究」第 9 回国際研究会、2012 年 2 月 16 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

⑱内海敦子、「タラウド語における結果・継続アスペクトを表す接頭辞 UA-形の分析」、2011 年 11 月 26 日、大阪大学、大阪府豊中市待兼山町.

⑲内海敦子、「タラウド語の結果相・継続相を表す接頭辞 UA-が付加した動詞について」、2011 年 10 月 22 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

⑳Utsumi, Atsuko、‘Deixis and Spacial Reference in Bantik’、 「インドネシア諸語の記述的研究」第 7 回国際研究会、2011 年 7 月 22 日、国立民族博物館、大阪府吹田市千里万博公園.

㉑内海敦子、「バンティック語の所有」、「インドネシア諸語の記述的研究」第 6 回研究会、2011 年 4 月 23 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都府中市朝日町.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
内海　敦子　(Utsumi, Atsuko)
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：７０４３１８８０

(2)連携研究者
Jukes, Anthony
La Trobe 大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：なし

(3) 連携研究者
Lestari, Sri Budi
東京外国語大学・インドネシア語学科・非常勤講師
研究者番号：なし

(4) 連携研究者
Paat, Hendrik
インドネシア国立マナド大学・外国語学部・教授
研究者番号：なし